

昭和四年に木造の日本家屋として建築された「雁がね荘」は既に、八十八年の年月が経過していることになる。その程度の年数をもって、古民家と称することには甚だ憚りがある。しかし、正面玄関を入れて、式台を上がると、下中奥と三つの座敷が襖越しに連結し、その先は庭の景色へと繋がっている。この間取りは、武家の書院造りの派生モデルではないだろうか

また、雁がね荘の古民家としての骨格を形成する、柱や梁の材木は古くから港町として栄えた「阿万」の地にあった、某お屋敷の解体に際し、それら古材の譲渡を受けたものと聞く。今も残る柱の仕口跡の数々が、その証しである。

一方、現代風に改装されているエリアもある。台所、風呂場などの水回りの設備は、洋風化が進んでいる。さらに、今春施工を行った耐震補強工事及び屋内空間の改装に際し土間エリアを大きく拡張し、その床には淡路瓦を敷き詰めている。高温焼成の技術を用いて製作された現代の新素材だそうである。

即ち、このような背景があるので、少々大げさだが、新旧のスタイルがお互いに、引き立て合って共存する、「ハイブリッド」な屋内空間である、と自称することになっている。

さて、命名の由来であるが、古い材木と共に、屋根瓦や鬼瓦も運ばれて来たようである。過日、屋根の葺き替え工事の後、一旦は庭に置かれることになった、これらの大小の、それぞれが数基に及ぶ鬼瓦には「丸に頭合わせの三つ雁がね」の家紋が刻まれている。この家紋に接し、やがて心からなる敬意を表したいと思うに至り、この施設の名称を「雁がね荘」と命名することにした。

雁がね荘は古民家ではあるが「ハイブリッド」な造りでもある。ご縁があつて、ご滞在いただく皆様方には、どうか仲良く楽しく、かつ、有意義な時間をお過ごしいただきたいと、心から願っております。

平成二十九年九月吉日